

アドルフ・ヒトラーの戦争青年（1）

— 国家社会主義（ナチス）の青年活動 1939～1944 —

帝国青少年指導本部編／ミハエル・ブドルス校訂

訳：大串 隆吉

解説

以下に翻訳する文書は、ドイツ連邦文書館所蔵資料NS26（国家社会主義党（ナチ党）中央文書館資料）にあり、ドイツ・ミュンヘン現代史研究所ベルリン部研究員ミハエル・ブドルス（Dr. Michael Buddrus）によって発見された。これは「アドルフ・ヒトラーの戦争青年」（Die Kriegsjugend Adolf Hitlers）あるいは「国家社会主義の青年活動 1939-1944」（Nationalsozialistische Jugendarbeit 1939-1944）と名付けられて出版されるはずであった^①校正刷りである。分量はA 4 二段組 212p で、序文と22の章からなる。

この校正刷り第2章1頁の末尾に校正者が押した考えられる「44年7月18日」付の捺印がある。また、第12章の1頁に＜「Ern.」Wにゆだねる。18/9＞という注記がある。これらから、これは同年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件の直前には存在し、9月までの間に校正が行われていたと推察できる。

ミハエル・ブドルスは、今回の翻訳のために丹念な考証と文書の意義を書いているが、残念ながら紙数の都合で割愛し、以下の若干の紹介にとどめざるを得ない。（なお、註はブドルスによる）

まず、この文書の成立事情について。帝国青少年指導本部組織局は、1940年、42年にヒトラー・ユーゲントの戦争動員に関連した資料を収集するよう指示を出した。^②しかし、組織局は戦争後期に弱体化し、また年表作成事業が1941年夏に国家社会主義青年活動帝国研究所（Reichsinstitut für Nationalsozialistische Jugendarbeit）に移された^③ことから、この研究所で作業が行われた可能性が強い。この研究所は、帝国青少年指導本部の「学問の場」とし

て存在し、ヒトラー・ユーゲント活動の全資料を把握することも仕事であったが⁽⁴⁾、1944年9月5日に閉鎖された⁽⁵⁾。この閉鎖時期は校正作業の最後の時期と重なっているため、ここで作業されていた可能性が非常に強い。

この校正刷りは完全ではない。二、三の章には註がない上、文体も統一されていない。各章の分量が不統一であるため、ヒトラー・ユーゲント活動の現実に適合していない。例えば、組織の管理・運営についてはわずか3頁であるのに、戦争期に相対的に弱かった外国活動は10頁、文化活動は21頁である。さらに三章分が計画されていたと推察される。⁽⁶⁾

執筆者は、一人ではなく複数である。そのため、異質な章構成と文体となり、修正者により文体が一致していない。そして、帝国青少年指導本部の二、三の部局長と上級者が当時書いた新聞、雑誌の論考と比較すると⁽⁷⁾、この本部の各部責任者やその代理が、彼等の活動領域に対応した部分を執筆したことが明らかである。

次に、研究上の意義についてである。ヒトラー・ユーゲント研究は多数あるにもかかわらず⁽⁸⁾、第二次大戦中の研究は少なく⁽⁹⁾、1933年から39年までの時期と戦争期との研究の分量を頁数で比較すると16対1となる。戦争期については、航空部隊助力者、疎開活動、戦争終末期の戦争動員に限られ国家社会主義ドイツの政治的、経済的、軍事的そして思想的戦争指導における多様で、細分化された総括的な像を描くまでになっていないし、驚くことに帝国青少年指導本部の構造、活動領域、方法、地域活動、国家の他の活動、機関との結びつきや複雑な行動は考慮されていない。

この文書は事実関係、データ、諸関係、多くの細部の活動について叙述されており、未整理で叙述されている資料も多くの資料によって立証される。すなわち第三帝国の青年組織の戦争史の事実の資料となる。1944年当時、ヒトラー・ユーゲントの戦争動員が政府に一元化されたため、その独自性が揺らいでおり、また様々な部署で「放任」「不服従」がおこり、青少年の犯罪増加も無視できなくなっていた。そのため、叙述は青年組織の独自性とその意義、成果を強調している。そのなかに第三帝国の青年指導層の思考構造を読みとることが出来る。

目次

- 序 アドルフ・ヒトラーの戦争青年
- 1, 戦時期のヒトラー・ユーゲント
- 2, 国防鍛錬
- 3, 職業動員
- 4, 新領地の建設
- 5, 東部動員と国民警察活動
- 6, 拡大する学童疎開
- 7, 市町村の青年
- 8, ヒトラー・ユーゲントの戦争動員
- 9, 戦時期の思想教育
- 10, 戦時期の女子青年教育
- 12, 健康と養育
- 13, 体育
- 14, 戦争期農村奉仕
- 15, 農業青年の活動
- 16, 戦時期の青年育成
- 17, ヒトラー・ユーゲントと学校
- 18, ヒトラー・ユーゲントの外国活動
- 19, 青年奉仕義務と徴募制度
- 20, 監視と裁判権
- 21, <欠落>
- 22, 戦争援護奉仕
- 23・24, <欠落>

Die Jugend

Die Jugend und der Krieg

Was hat und warum wieder einmal die Deutschen vor Krieg gebracht wird, so ist in der Regel die Antwort wohl nicht anders als die, die wir schon im letzten Weltkrieg erlebt haben. Die Deutschen sind wieder einmal die Opfer der Weltmacht geworden. Die Weltmacht hat wieder einmal die Deutschen in den Krieg hineingezogen. Die Deutschen sind wieder einmal die Opfer der Weltmacht geworden. Die Deutschen sind wieder einmal die Opfer der Weltmacht geworden.

Die Friedenslieber der Hitler-Jugend

Es ist eine Tatsache, daß die Hitler-Jugend in Deutschland nicht nur ein Jugendverband ist, sondern ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat. Die Hitler-Jugend ist ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat. Die Hitler-Jugend ist ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat.

2

② 左下に 1994 年 7 月 18 日の印と, 右下に 予定出版社印が押されている。

Die Tätige Jugend

Tätige Jugend 1944

(Erschienen im Oktober 1944)

Vom was der Hitler-Jugend eines nicht verstanden haben, so ist es in der Regel die Antwort wohl nicht anders als die, die wir schon im letzten Weltkrieg erlebt haben. Die Deutschen sind wieder einmal die Opfer der Weltmacht geworden. Die Deutschen sind wieder einmal die Opfer der Weltmacht geworden.

Die Friedenslieber der Hitler-Jugend

Es ist eine Tatsache, daß die Hitler-Jugend in Deutschland nicht nur ein Jugendverband ist, sondern ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat. Die Hitler-Jugend ist ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat. Die Hitler-Jugend ist ein Jugendverband, der die Deutschen in den Krieg hineingezogen hat.

2

① 章の題が修正され, 右上に 予定出版社印が押されている。

アドルフ・ヒトラーの戦争青年—国家社会主義青年活動 1939—1944
Die Kriegsjugend Adolf Hitlers-Nationalsozialistische Jugendarbeit
1939-1944

序 アドルフ・ヒトラーの戦争青年¹

ヒトラー・ユーゲントを少しでも非難できないとすれば、それは怠慢である。ヒトラー・ユーゲントは才気を秘めて静観しているのではなく、むしろ怠慢という姿においてでもなく、為すことを知っている。ヒトラー・ユーゲントとBDMの女性達の日々、もちろん少年団員や少女団員の日々も、青少年指導本部が彼等に影響を与えることが出来、与えるべきである限り、すべてにおいて戦争動員で満たされている。総統が1940年6月にNSDAPの初代帝国青少年総裁兼ドイツ帝国青少年総裁、帝国指導者(Reichsleiter)バルドー・フォン・シーラッハの後任としてドイツ青年の指導をアルトール・アクスマンに委ねたとき、彼もまた数百万の数の青少年部隊を休み無く戦争に動員する責任を負った。青年は常に帝国の力の源泉としてのみとられえられた。彼等の活力は実際、無限であり、かつ本来的で、無尽蔵である。常に彼等の勇氣と自信、肉体的・精神的有能さそして無限の確信でもたらされたものは、戦争で利用されねばならなかった。この数年信仰告白(Wortbekenntnissen)で表明されたものは、何回となく語られ、実行に移され、形作られそしてそれにより実証されるはずであった。新しい理念、平和な時代にあふれるばかりの創造性で生み出され、有効に形作られた新理念を持ち出すことが重要なだけでなく、今や青年が彼等の世界観を現実に生かす行動が行われなくてはならない。

青年の活動はこの間民族共同体の意識の中に深く入り込んだ。ヒトラー・ユーゲントは戦争開始以来、精力的に働き、彼らの活動の可能性が少しでもあるところに救援に駆けつけた。彼等の戦争動員の形態は、実に多種多様である。純粹な理想主義と言葉を必要としない自明さで彼等は長期化した戦争により絶え間なく変化する必要に対応しうるようになった。自然の成長が組織機構の変化以上のものを示した。この種の大衆の動員と運動の際に確実な計画と規制がなくてはならないことは確かであり、書類のやり取りと官僚性でさえしばしば避けられない。にもかかわらず、常に青年の動員意志は動員命令を凌駕していた。

帝国防衛のための閣議の指示により、青少年指導本部に学校と職場の外で青年の戦争総動員のための責任が移行された時²、戦争中青年の過剰な負担をなくすことは結局考慮外となった。前線と銃後とがドイツ人の生活の確保のために結びついているときに、行動し、後回しにしないという青年の熱望は、管理され、指導されなければならなかった。しかし、青年のこの熱望は消えることなく、今日なお、戦争中における青年の生活と創造の決定的な推進力である。

張りつめた日々の課題への絶え間ない挑戦は、自己指導と自己責任の直接的な表現である。そのために青年はバルドー・フォン・シーラッハのもとで計画的に教育され、そして今日青年は彼等の最善の伝統的素質を見せている。この自己責任は青年に権利を与えるのではなく、新たな責任を与えるだけである。それは青年の生活の自発的かつ心から把握された使命である。**時代が彼等に重荷として負わせているものを彼等が喜んで受け入れ、無意識に満たすことは今日青年の真の自由を意味する。**彼等は完全な自己決定のなかで彼等の意志と力を役立てることが出来る。それによって社会生活の必要から自己を引き離すことなしに、彼等の情熱、活気、彼等にだけ固有な本源性がいまや民族の利益のために正しく効果を発揮することが出来る。青年の活動は国民生活の最後の分岐点の中まで今日感知できる。

無数の形態で必要になった戦争動員により、青年の活動分野はせばまるより拡大した。それは、ヒトラー・ユーゲントがすべての機構と組織において指導的な有能な人材の損害を受けたにもかかわらず生じた。その活動は、最初から全面的であり、戦争中でもけっして一面的に行われなかった。どの活動が、棚上げされてもよかったというのであろうか。例えばスポーツ活動は。それは軍事訓練の準備段階であった。あるいは文化活動は。それは祖国への一体感を最も活気づけ、精神を高揚させる要素の一つであった。それは、二つのよく知られた現象形態を思い起こさせる。ひとつは兵士、負傷者、移民、軍需産業労働者の前で演じる移動素人劇団であり、ふたつめはドイツの家族のための遊び道具である。あるいは、世界観教育は戦争の中で重要ではなくなったのか。それはこの世代の決定的に重要な指標であった。軍事予備教育はたとえ不完全で無計画的であっても、世界大戦のなかでも体験できた。勝利のために団結し、目

的意識的に不屈に進撃する青年の養成はようやく現在おこなわれている。人間の数や資源の支配によってではなく、不屈の精神によって戦時青年は過去から区別される。あるいは職業・社会活動は抹消されることが出来るのであろうか。我々は平和の時代に職業の最高水準を要求せず、そのかわりにたゆみなくその社会的前提を準備したし、今や青年の職業能力は非常に減少したドイツ人の労働力のもとで特に、しばしば決定的に重要になったからと言って、社会的鍛錬の豊かな可能性が忘れられ、否定されることできるであろうか。

組織の改組は完全になされ、戦争に条件づけられた簡素化の精神で遂行された。しかし青年の仕事は全体的であり、彼等の生活のようにすべてを包括していた。彼等は、彼等の生活の総合性故に多様な手段で戦争遂行に貢献できた。それは、大人が兵士になるか、あるいは職業だけに責任を負ったのと対照的である。青年のこの特徴は何も変わらず、逆にその特徴は戦争の過程でより一層鋭くなった。

青年は今までの戦争の年月に無理をしないわけではなかった。彼等が際だたせたのは、ねばり強さである。燃え上がる、獅子吼を伴う興奮はまれにしかない。しかし、目的への確固とした一貫した把握がすべてに生きている。例えば交通または通信分野、農業への動員のような戦時動員はいつも純粋な喜び、生来の素質の表出であるわけではない。しかし、それは疑問を抱かずに矛盾なく遂行される義務である。それがねばり強さである。それによって青年活動は今日支えられている。そして、それは足元をぐらつかせる感情の一時的な発露よりも確固とした基礎である。青年がそれにもかかわらず、言葉に表せない理想主義、すなわち内部で灼熱し、ところを占め、言葉ではなく態度で現され、そしてしばしば全生活を決定づける理想主義に満たされていることは、まさに戦争中にドイツ青年の価値ある選良が農民生活に応えたヒトラー・ユーゲントの農村奉仕が証明している。

多くの点で厳しい現在は、我々の運動の忘れられない闘争の時代に似ている。当時と今の青年とには基本的な違いはない。当時恐れを知らない少数の者を魅了した精神は、今日では帝国の全青年世代を支える原動力としてある。党は当時も今も青年の故郷である。しかも、今日我々は青年奉仕義務を持ち、青年運

動としてのヒトラー・ユーゲントの性格は変わらない。総統と全国民の前で傑出したという激しい熱望は、君たちがドイツの街頭で赤色テロに立ち向かった日々と同様である。党の青年活動で大きくなったその渴望の故に、ドイツのための闘争の時代にかけて倒れたあのヒトラー青年と空襲の夜またはすべての前線で犠牲となった青年達との間には神聖な兄弟愛がある。航空部隊で最高の兵士の美德を示した多くの勇敢な青年に総統の名において胸に勲章がつけられる時、すべてのはつらつと輝いている表情からも常に忘れられないあのヒトラー青年ヘルベルト・ノークスの顔を見る。

戦争動員だけを常に経験する青年はもはや基本的に青年でなく彼等には自由な自然な快活さが欠けているという意見が時折述べられるようだ。確かに、彼等は戦争の中でより真剣になった。それは誰を不思議がらせるのだろうか。彼等が心から結びついている彼等の父親と兄弟、彼等の部隊の指導者達は外国で敵と戦っている。多くの人が帝国のために倒れ死んでいる。彼等はそれに心を動かされないでいられるだろうか。そして、故国で彼等は何度も火炎と爆弾の雨の中に立ち、若年にもかかわらず防衛に積極的に立ち仲間と隣人を失った。それは感性に深く刻みつけられ、硬い決意がその顔に現れている。少女達も例外ではない。心配のない、子どもらしい屈託のなさという生活を我々は彼等にももちろん用意できない、この青年にもはや用意できない。

しかし、もしこの青年が笑いを忘れたと思うなら、彼等を見損なっている。すなわち彼等はなおほがらかに歌を歌い、くつろぎの夕を主催している。それを国民は知り、特に両親は知っている。例を挙げるなら、子どもの疎開先では、かつてのように本来の新鮮な生活が支配している。青年は、今日ではまさに多くの傷をうけているからこそ、ハイキングに今も行き、自然と故郷の体験を楽しんでいる。

また、行動と組織的動員だけが彼等の日常生活を決定しているわけではない。個人の教育と形成、全人格的素質と能力のために十分な可能性が作られている。我々は大衆だけでなく、特に自発的な決意とかれの性向から共同体への奉仕に応じて自己を完成させようとする有益な個人も一貫して視野に入れている。戦争四年目でも、感受性豊かな人物は生き、美と崇高さにあこがれる魂は青年の

中に死んではいない。常に必然的にもたらされる緊張のもとでドイツの本質の偉大な具現者の創造物に接して豊かになる機会が利用されている。強固で責任感旺盛な行動と計画的な鍛錬に精神を強化した青年は向かう。それなしに若い者は内的に生長し、人格になることはできない。

我々は、青年をつかむために、彼等のもとに行かなければならない。我々は彼等について語るだけでなく、彼等に近づき話し合わなければならない、まさに彼等の中に入り込まねばならない。そうすれば彼等は心を開き、そして彼等と共に若い活動力の全世界が開かれる。そうすれば、脇に寄り、この時代の威力と偉大さにつかまれないでいる無為の青年、勝利のために全てをなすという覚悟の神聖な炎に焼かれない青年はもはやいないことが示される。それが1944年の青年の特徴である。ドイツはそれを誇るし誇りに出来る。

第1章、戦時のヒトラー青年¹

この章と後の叙述で示される青年は、おおよそヒトラー・ユーゲントが意味されている。それ以外にドイツでは青年として特徴づけられうる同年齢の統合組織はない。今の青年奉仕義務でなく青年の統一組織は1933年にすでに目の見えていた。顔を持ち、同じ意志で活気に満ちそして同じ目的を持った、強固に組織された共同体として今や青年は政治的精神の中に存在している。この時から青年はまさに青年として公的な事象に一致して応えることが出来、彼等が行い、彼等自身に起こるものにより彼等は事件でさえある。政治的統一体としてのみ青年も歴史的存在をしめる。それ故青年が平和の中でどのような表情をするか、彼等が平和から戦争への過程をいかに行動し、最終的に戦争それ自体を内的、外的に如何に克服するかは、ヒトラー・ユーゲントとその生活表現からのみ読みとらせる。戦争への支配的な積極的な反応と並んで消極的な反応が当然ある。これはしかしドイツが国家社会主義であるから典型的でなく、それゆえ局外者によって代表される。これは今の事態に影響を与えず、その結果現代の考察にさいし場所を持たない。

ヒトラー・ユーゲントの平時形態

敵の宣伝においてすでに平時にヒトラー・ユーゲントに対し—しかし戦時は

別である一軍事教育批判が行われた。そこではなかんずくドイツの男子青年が教育された同志的基本的姿勢と軍国主義が明らかに混同された。これはしかし基本的に純粋な倫理的用件を提示したのであり、軍国主義はこれに対し戦争のための教育である。ヒトラー・ユーゲントでは結成から1939年9月1日まで一日としてこれは行われなかった。

ヒトラー・ユーゲントは戦争勃発まで、今日まさに感動させる平時形態をたもった。あらゆる主導、青年運動の木に出た若い芽である新しい理念の無尽蔵の成果、あらゆる企画と事業は、平時の年には内部に向けて行われ、青年の目の前で、光り輝き、不断に美しくなった理想にあったものを平時の活動で創るという意志を示した。当時生まれた年次標語がある：学習の年（1934）、鍛錬の年（1935）、ドイツ若い国民の年（1936）、郷土創造年（1937）、相互理解の年（1938）そして健康の年（1939）。

最後の二年の年次標語が青年活動の特徴を示している。それが平時に基準であり、特に顕著であった。思い起こせば、バルドー・フォン・シーラッハが戦争の前年の始めに「我々の客として独仏、独英、独ベルギーキャンプにそして多くの他のヒトラー・ユーゲントスキー場に来た」さらに「過去に国家社会主義ドイツとヒトラー・ユーゲントの教育施設を訪ねた」「外国の若い男女の友人」に送った歓迎の言葉²が皮肉に響く。この挨拶がなされ、「相互理解の年」が宣言された時、帝国の青年は未来を美しく思い描き、青年は誰も戦争が起こるとは考えなかった。

青年は国家と同じ状態に置かれ、戦争を彼等が起こすことは出来なかった。百万人を数える青年組織は一晩で強固にならなかった。それはその最終的な形をみつけ、すべての成員に実行可能になるために時が必要であった。この能力は**指導部の問題**であった。指導部と指導者は同様に短期間に成長しなかった。確かな指導のしきたりが生まれてはじめて完成した。戦争の前年にこの状態になった。ヒトラー・ユーゲントは数の上でも経験と学習により彼等の獲得した教育的能力に関しても十分な指導層を持った。彼等は、人格的に満足のゆくものであり、安定していた。全ての組織に経験ある男女の指導者がいた、その多くにはまだ闘争時代の経験が生きていた。そして歴史的に偉大な政治結社、後

継世代を彼等の共同体と世界観の重要な経験に導くことが出来た。いまや機が熟した：新しい教育の担い手の加入によるドイツ青年運動の革命は毎年、彼等の果実を示すべき立場にあった。青年期に始まるドイツ人の政治教育が行われ、かれらのすべての勢威の充実の兆候を示した。それは繰り替えし行われるために指導できる人間の数と素材に支えられていた。この前提がなければ、教育は
なくただ組織があるだけである。しかしそれは戦争により第一に不幸に見舞われた。そして事実、最初の動員がドイツ青年運動の建設に苦しい裂け目を作った。

青年活動の実践の面と実際の面での状況は似ていた。多くの事が平和の6年間の建設年に達成された。しかし、青年指導者の活動が党、国家そして全公共団体による完全な支援のおかげで成功すればするほど、より多くの課題が提示され、それはより創造的に、より情熱的に未来にむけて指針に沿って受け止められることが出来た。青年が平時にその生活と奉仕の事業で得た物、かれらの幸福に貢献する無数の成果をここで詳細に紹介できない。それらはヒトラー・ユーゲントの今日の世代にとって自明なこととなっており、運動と国家の助力から感謝して受け取った過去の革命的事業であった。しかし、さらに休むこと無く順調に多くの前進をかちとってきた。青年の形成は青年の終わりより始めにあった。社会的保護における巨大な成果の上にさらに遠大な目標が現れていた。中断されることなく改善された、何もなかった生活・労働条件の領域に於いて、戦争が破壊しつくさなかったと言わないまでも、本質的に限定した収穫物がまたもたらされることが出来ていればよかった。当時も又目が向けられていた方向において、至る所で戦争の勃発は継続的で緊急に必要な主導性に、創造的な計画と建設に辛い無条件の停止を要求した。さらなる経過のなかで戦争の勃発が結局様々な活動領域を稔り豊かにしたとしたら、それは副作用であり、平時においては計画的な発展に有利なように喜んで放棄されたはずであった。

戦争への回答

戦争開始数ヶ月に男性指導層がほとんどすべて軍務についたことは自明であり、他は記録にとどめられなかった。不平を言わずにヒトラー・ユーゲントは、全ての組織の最大の人員の悪化に堪えることを受け入れた。その構成員は例外

なく軍務可能な年齢であった。さらに彼等にとって**兵役義務**を果たすことだけではなく、戦争に応じて変わった形態に以前と不変な倫理的観点に従い今までのように共同体の模範になることが重要だった。ヒトラー・ユーゲントの指導者にとって選択の余地はなかった。組織はそれ故、一度にその指導層を奪われた。人員の損失を他の階層とその仕事も被ったが、それは団員が資材調達・処理と管理活動からあるいは青年教育から引き離されるかどうかを意味していない。

青年運動が野蛮な干渉によって破綻し、解消したとしたら、それは過去の長年の活動における青年指導の原則を貫徹出来ず、あらゆる攻撃から守ることが出来なかったであろう。その原則がヒトラー・ユーゲントの救いであり、彼等を維持できた。ヒトラー・ユーゲントはすでに始めから11歳の少年団員に彼等に適した責任を負わせた。彼等は一步一步上昇し常に計画的に訓練されてより高い指導的位置に習熟した。そして、全ての土地に、出征した青年の後に、空となった陣地を埋めたこの時代にふさわしい新しい指導層が立った。それはいつも摩擦がないわけではなく、しばしば若い力は彼等の指導課題の大きさに応えきれなかった、とりわけ一定の間隔でおこる指導部の交代が定期的に繰り返されなければなかった。しかし、全体的には**青年運動は若さにも関わらず要求された最大の負担を受け止めた**だけでなく、**克服した**と言うことが出来る。青年は青年により指導されねばならないという原則だけが、そして指導者の自然淘汰の伝統が、ドイツ青年の戦争動員を可能にした。これについては後述される。

青年活動の姿が変わったことは当然である。すでに平時にそれは民族共同体の他の活動分野と密着して行われることが目立っていた。しかし、すでに戦争の中でそれは完全に、今ではドイツの戦争指導に貢献する目的以外のなにものでもない全体の努力と融合した。戦争は青年活動で行われるべきものを規定した。前線の英雄的行為を見て男子青年と女子青年は郷土で今や滅私奉公を決意した。この決意を彼等の多様な活動が証明した。1939年9月30日に発表された事実に即した**ドイツ情報局報告書**は特徴的であった。

「青少年指導本部はその任により報告する：党，国家，国防軍そして産業の

各分野の要求に基づき、特にその切迫さから戦争開始後一週間に青年大衆が大規模に郷土でヒトラー・ユーゲントにより重要な課題に動員された。量的にはヒトラー・ユーゲント団員と女子青年団員が農村活動に最も多く従事した。とりわけ馬鈴薯類の収穫が青少年の大規模な動員を必要とした。次に警察、防空、郵便、鉄道そして公務の補助奉仕が行われた。効果的にヒトラー・ユーゲントの廃品回収活動は遂行され、また配給券配布を補助した。女子青年団員は彼女たちが必要とされた子沢山の家庭に、NSV (NSVolkswolfahrt, ナチス国民救済団) の駅奉仕に、軍病院の補助奉仕に、赤十字に、幼稚園に、避難民宿舎その他に動員された。

ヒトラー・ユーゲントによる動員は、提出された報告によれば戦争の最初のひと月に全帝国領で青少年百九万一千人を数えた。それによれば帝国で平均してヒトラー・ユーゲント団員八人に一人が故郷で何らかの特別な課題を自発的に引き受けた。

特別な課題を得たいという青年により表明された絶え間のない希望にかかわらず、青少年指導本部は労働力のためでなく、このような活動に動員する。将来青少年の動員が非常に減るか、新たに増えるにしろ、帝国青少年指導本部はどんな場合でも定期的なヒトラー・ユーゲント奉仕、青年の肉体的鍛錬と精神的指導の計画的な遂行のために気を配る。すべての少年団員とヒトラー青年、すべての少女団員と女子青年団員ならびに'信仰と美'団員はヒトラー・ユーゲントの統一した奉仕活動で故郷を助ける。たとえ彼等がさしあたり特別動員に投入されなくても。」³

9月30日の夕にラジオのアナウンサーは、最後に断言した。「このような軍隊を敵は持たない」⁴

青年は戦争を狂騒的熱狂で迎えなかった。今、戦争はそこにあり、青年は沈着に確信を持って戦争に立ち向かった。愛国心騒ぎは青年のものではなかった。彼等は無思慮に「万歳」を叫ばなかった。組織の蚕室効果により条件づけられ、しつけられた抑制が観察されることが出来た。

一層彼等は胸奥で燃えていた。不可避となった解放闘争は、青年以上に熱心

な擁護者を見出せなかった。彼等について、総統は帝国議会で開戦後最初の演説でふれた。彼等は「いずれにせよ美しい心を国家、**国家社会主義国家が彼等に期待し、要求するもので満たしているはずだ**」。⁵彼等は開戦後に総統のこの信頼に応えるために誠実に、必死に努力した。

組織的には戦争の最初の年は様々な変化をもたらした。それらはしかし、青年運動の組織に本質的に及んだのではなく、結集された力の統合だけを目的とした。司令部への集中、不必要になった部署の廃止と階級の変更・統合は、青年運動の統一された処理、内部統一を強め、一斉動員の効果を高めることに寄与した。このなかで、多くの部署が今や**女性の指導部によって動員された女性同志**によって埋められた、そして女子青年は彼女らが不慣れであった活動領域で無条件に賞賛された。この青年男女教育の強固な一体性は青年組織引き締めの一部であった。青年は戦争に対し、その歴史の中でまったく初めて男女一致した回答を与えた。

交代要員

「試練」という合い言葉のもとで、青年は平和から戦争へ転進した。「君達は数え切れない試練に身を置かねばならない」⁶は、NSDAP 帝国青少年指導者・ドイツ帝国青少年指導者である彼等のバルドー・フォン・シーラッハの最後の指令だった。この指令を含んだ1940年の新年の呼びかけで、彼は総統が彼の再三の願いに応え彼に志願兵として軍務につくことを許可したと報じた。ツェンツェンフューラーのラウターバッハと1940年5月来のオーバーゲビーツフューラーのアクスマンは「ドイツ帝国青少年指導者全権代表」としてドイツ青年運動の指導を引き受けた。1940年9月1日には、総統は1940年8月10日付でバルドー・フォン・シーラッハをウィーンの地方長官兼大管区指導者に任命し、NSDAP 帝国青少年指導者・ドイツ帝国青少年指導者の職務を解任したことを公にした。バルドー・フォン・シーラッハは、全ヒトラーユーゲントの監査役兼NSDAP 青少年教育総監、帝国指導者 Reichsleiter としての地位のままで命じられた。総統はこの時に退任した初代NSDAP 帝国青少年総裁に次の手紙を送った。

親愛なる党の同志シーラッハ！

ベルリン 1940年8月10日

地方長官兼大管区指導者ブリュッケルは新たな、極めて重要な帝国の任務遂行のため、今までの任務から去らねばならない。私は貴方、党同志シーラッハをウィーンの地方長官兼大管区指導者に任命した。それはあなたの希望だった故に、西部戦線の戦闘終了後あなたの部隊から去ることを許し、あなたは新たな任務につく。あなたに新たに与えられた社会的・文化的・政治的任務に対する私の信頼は、ドイツ帝国青年運動の創設者・指導者としてあなたが完遂したすばらしい指導の評価から生まれている。あなたの名は常にこの活動と結び付けられてきた。あなたはそれゆえ将来も帝国指導者としてのあなたの能力から依然としてドイツ青年運動の責任を私に負う。

心から連帯の挨拶を アドルフ・ヒトラー⁷

ナチス帝国青少年総裁・ドイツ帝国青少年総裁に総統は、アルトール・アクスマンを任命した。ハルトマン・ラウターバッハは数週間後ハノーバーの大管区指導者兼州知事に任じられた。

バルドー・フォン・シーラッハの退任により、青年の指導にそれまで像と理念を与え続けてきた偉大な青年指導者が退いた。彼は、ドイツ青年の統一者だった。無数のブンド、同盟、流派、宿泊所そして教育原則から、彼は総統の名を名乗り、総統に忠誠を誓う巨大なドイツ青年運動を創造した。国家の共同活動にNSDAPを通じ青年を獲得したことが彼の貢献である。青年が彼に負うたもの—その人格的衝撃とくに指導者性を彼から得た—はここで簡単に詳述されえない。バルドー・フォン・シーラッハは、彼の恐れを知らない勇敢な態度の故に国内外の世界観敵対者に最も憎悪された一人であった。彼は、帝国の若い世代の文化意志を彼の人格で体現し、彼の演説で証明した。彼の活動の足跡は青年の生活から決して抹消されることはできない。

新帝国青少年総裁アルトール・アクスマンは任命時に28歳だった。兵士として彼は西部戦線の多数のコマンド部隊で真価を発揮し、東部戦線開始時に士官として重傷を負った。彼の活動は、平時に特に勤労青年に重要だった。多くの社会的前進は、彼の独創力のおかげである。計画的な健康指導、青年労働保

護法、新しい青年法の創造、職業教育の促進と全国職業競争の創造、このような革新は彼の名と結びついている。特別な愛着を持って彼は特にヒトラー・ユーゲントの農村奉仕を組織し、あらゆる困難を突破した。ヒトラー・ユーゲントベルリン地区の長年の指導者としての活動の成果により、それに加え指導部活動から得た豊富な経験を携えて新たな役割を与えられた。着任後すぐ彼はヒトラー・ユーゲント宿泊所建設責任者のヘルムート・モッケルを青少年指導部のシュタブライターに任命した。

まさに戦争勃発の時期にこのような交替が起こった。それぞれの教育共同体はその先頭に立つ顔をもつから、それは深刻であったろう。しかし、教育共同体は青年運動の根本的变化をほとんど招かなかった。具体的な実際の活動領域は拡大したが、もはや新たな理念は続けては登場せず、現実化も起こらなかった。それは観念より必要により起こった。なぜなら青年の実際の行動は戦争とその必要により決定されるからである。

青年奉仕義務—国家の青年か、党の青年か？

特別に緊張した指導部の状態に関わらず、ヒトラー・ユーゲントは戦争中組織的に更に拡大された。増大する戦争動員、青年の総動員は最後に残った男子青年と女子青年をも登録を必要とした。1940年になってドイツ帝国青少年指導者の断固たる決定により**青年奉仕義務**が実行に移された。青年奉仕指令第2章に基づき、ヒトラー・ユーゲント奉仕法の当時の適用範囲のドイツ国民であるすべての10歳の男女はヒトラー・ユーゲントに入ることが義務となった⁸。1940年4月29日に最年少の青年（1929ないし30年生まれ）は青年奉仕義務の原則によりヒトラー・ユーゲントの隊列に加わった。戦争が偉大な教育活動にもたらしたあらゆる困難にかかわらず、青年奉仕義務具体化の道が切り開かれ、そこに集約された経験により常に改善され、維持された。最終的に1941年9月12日に残りの年長者にもドイツ帝国青少年指導部の布告によりヒトラー・ユーゲントの奉仕の召集が実行された。⁹

青年奉仕義務の遂行につれて、その国家の施設・事業はヒトラー・ユーゲントへの教育委任活動として設定された。ドイツ帝国青少年指導者は下部の**国家**の活動部署を管轄し¹⁰、また地区と隊においてNSDAP帝国青年総裁は彼の配

下の指導部の奉仕活動部署を確保した。彼らは国家機構の挿入により青年奉仕義務と関係した管理活動から解放され、それにより彼らは本質的に指導部の課題に集中できた。指導部の先述の若返りを考慮すると、これはヒトラー・ユーゲントの隊列における青年教育維持のための必須の前提のひとつだった。この間ヒトラー・ユーゲントの奉仕部署と国家のそれとの協同活動は根を下ろし、数多くの青年奉仕義務と結びついた正しい問題が解明され、固有の青年奉仕法が生まれ、国家社会主義青年組織はその固有の国家法上の性格を獲得した。

1939年3月25日の青年奉仕指令の布告⁴以来、ヒトラー・ユーゲントは今や**国家青年**になったのかという問いが投げかけられた。この問いには、ヒトラー・ユーゲントは今もなおNSDAPの下部組織であり、それにより青年運動であり、国家組織ではないと明確に回答できる。それは、イタリアの青年組織のように国家によって作られず、国家から指導されなかった。ヒトラー・ユーゲントは、バルドー・フォン・シーラッハが定式化したように青年のための国家の創設物ではなく、国家のための青年のそれである。青年活動における日常的な国家事業は、単にその事業にふさわしい政府の権限をヒトラー・ユーゲントの利益の中で利用するという課題を有する。その利用が効果的で目的に適合していればであるが。国家事業はその政治的委任の完遂の際にヒトラー・ユーゲントのため助力の位置をしめるが、決して青年運動の特質に抵触しない。青年活動の推進力が、常に任務への**自発的**献身であることは完全に理解されている。強制的任務遂行は実用的、すなわち教育上無価値である。戦争総動員のために時折青年奉仕義務の警察の強制が必要なとき、この場合それは青年運動とは別になされねばならない。しかし、当該青少年は、共同体から追放されることを恐れ、国民同胞への義務不履行者として糾弾されてしか離脱できないような共同体の思い切った手段で再度動員される。ヒトラー・ユーゲント団員であることから生ずる義務は、今日の青年には影響のない連中によってのみ強制として感じられ得る。

他の奉仕義務（通学義務、労働義務そして兵役義務）に対する青年奉仕義務の関係は最終的にいかにつくられるか—発展はまず開始と共に生まれることは明白である—、青年奉仕義務の完遂あるいは非完遂からいかなる結果が生じる

のか、それについて判断するのは将来に残されている。青年奉仕義務が教育担当機関（家庭、学校、ヒトラー・ユーゲント）との関係をも直接持つことは、明白である。戦時にそれらの協同は強固になった。特にヒトラー・ユーゲントと家庭は最も密接な結合を生み出した。なぜなら両者は今まで以上に重なり合って指示され、お互いに全機会を援助しなければならないからである。青年の戦争動員の多くの形態の下には、もっぱら家族と家庭に役立つ多くのものがある。女子青年活動のかなりの部分はここに入れられるべきである。しかしまた、ヒトラー・ユーゲントの遊び活動、ドイツ家族への無比の贈り物も忘れられてはならない。そのうえに両親に対する畏敬の念という教育の古来の原則が戦時のヒトラー・ユーゲント活動で強められ強固になった。

ヒトラー・ユーゲントの党との関係は、指摘したように、青年奉仕義務の結果変化しない。それはNSDAPの後継者組織であり続ける。この隊列からのみ党は前進する。ヒトラー・ユーゲントは始めから終わりまで党の機関である。党は、帝国青少年総裁アルトゥール・アクスマンの言葉に依れば青年の故郷である。そこから彼等は生まれそのために育てられる。ヒトラー・ユーゲントの指導者組織の価値ある目標は、そこから生じ、国家社会主義運動の指導体に常に後になってからの確証を残す。

戦争標語¹²

「試練の年」が宣言された時、まだ短期戦が予想されていた。試練は一年で終わらず全面戦争と関連がある。それゆえ標語は今日もなお有効である。年月は、この時代に戦争に勝つかどうかという、新たに厳しい試練を引き受ける。それゆえ、1940年の標語は、現在の指導者層がヒトラー・ユーゲントの戦争形態だけを自覚的に経験したゆえに、青年活動の内的規律になった。

軍事作戦の進行で1939年に東部、1940年に西、そして1941年に南東の旧ドイツ領土が帝国にもどった。この経過は青年の現代認識にとって基本的な意味をもち、1941年に帝国の国境地域に共通の独自の活動が向けられた。標語「新領土の建設」が唱えられた。それは全青年に向けられた。新領土における活発な主導性とこの年に青年共同体に新たに加入した若い仲間達を全力で支援するという従来の領土の青年の努力が一体化した。新領土統治の使命を受けた

政治機関によって、青年活動は当地再建の先頭にたつことが常に繰り返し確認された。その間に新旧領土の間の活動の違いは本質的にせばまった。昔のポーランド、チェコスロバキア、ベルギー、フランス、ユーゴスラビアで育ったドイツ人青年は、昔から大ドイツ帝国の生来の構成部分である。固有の古代ゲルマンの境界を越えた視線、その大共同体への新たな構成員の運命への強烈な関心は、青年の中に彼等が決定的な獲得物として戦争から守り抜こうとする帝国意識をとりわけ強固にした。

新領地での建設活動の重点は、1941年のロシアへの軍事行動に感銘を受けながら、ドイツ東方に急速に拡大した。新東方帝国領地の人的資源の欠乏は、青年により埋められなければならない。武装農民だけでなく、熟練したドイツ人の職人、商人、熟練工、特に青年政治教育者がこの隊列に属する。この歴史的課題認識により帝国青少年指導者は、1942年に標語「**東方動員・農村奉仕**」を発した。それ以来東方領地は、国家社会主義青年運動の主導性と人的資源で血がかよわされた。青年の東方動員は、青年にとって文化・教育・社会生活の全領域での権威ある国権の担い手の成果にむけての断固とした奨励を意味した。青年の顔は東方に向けられた。彼等はこのドイツの運命圏で、多くの世代にも疑いなく彼等の残響が見つけられる方法で自覚的に行動した。

年間標語で最初具体的個別課題として行われたヒトラー・ユーゲントの農村奉仕は、同様に東方での試練に向けられた。1942年と43年は、参加者と指導力の選別と質的向上の過程であった。

「新領土の建設」並びに「**東方動員と農村奉仕**」は、12ヶ月に限定された課題を意味せず、継続的に通用する課題である。青年活動で現在生じている全てを包括した標語「**戦争動員**」(1943)によって言われることも同様である。実際の課題が集合名詞である戦争動員の下に直ちに満たされているか、あるいは青年の行動が、全体として、間接的に戦争遂行に役立ち、戦争に青年の生活が常に連結しているかどうか、勝利への思想についての思索を満たし支配した。青年の戦争動員が意味するものを民族共同体はその指導部と同様に今日よく知っている。

1944年には標語は、戦争動員の先頭に今や「**戦争志願**」が立つという明確

な表現を獲得した。国家は、戦争5年目に青年の尽きない道徳的エネルギーにこの呼びかけを思い切って向け、その結果を心配しないことを必要としている。そして結果は全ての期待を満たし、予想を上回った。軍隊的動員への意志は戦争最初の数ヶ月の事件ではなく、その真実は戦争のさらなる継続の際に一層証明されている。今や初めて、世界大戦が長期に続いているため、男子青年に兵役義務の時期にとらわれず、ドイツ軍の特に重要な一員に召集されるという希望を自発的に告げている者が増加している。¹³

しかし、注意がはじめ数と規模にだけ向けられていた後に、今や再び**個々人の教育と育成**に観察が向けられていることが、戦争5年目の典型的な特徴である。なかんずく特別に才能のある、個性的な若い人々に発展の可能性が与えられているときに、青年の素質と可能性は完全に動員されうる。1944年の新年教書で告げられた音楽・技術競争と文化的活動共同体の事業は示唆を与えている。この方向で差別化され、個々人によりよく適合した訓練の仕方が実行されうる。青年に存在する能力の堅実な栽培と結合して、疑いもなく全体的必要性に、戦争の必要性にだけでなく応じる青年教育は充実した。

戦争による育成

戦争は青年活動を停滞させた面と共に、多面的関係で刺激的にも作用した。今までの発展についての総括はそれを非常に明確に教えている。戦争は本質的なものを本質的でないものから際だたせた。平時に重要な問題となった官僚的妨害を即座に廃止し、権限を権威をもって決定し、そして特に、青年教育の努力の背後にある真の建設的な動機を戦争固有の必要性から、力強く確証した。

男子青年活動の二つの柱は、今「**軍事鍛錬と勤労働員**」、すなわち兵役の準備と職場での義務を忠実に遂行するための職業訓練である。戦争は期待通りの明瞭さでこの優位性を引き出した。前線と銃後はその獲得物を同程度に今日戦争から引き出している。しかし理念の浄化が伴われていただけでなく、実際の前進が観察もされうる。しかも少なくない活動領域で。青年法は戦争になってその固有の発展と完成をとげた。青年活動の国家領域の確立と青年奉仕法の出現はすでに述べた。健康指導の分野では国家と党の仕事の全般的な統一に依りて最初の決定的な成果が導き出された。例えば定期的な歯磨き、集団検診の遂

行そして男子青年の体力増進の呼びかけのような。学童疎開(KLV)の拡大に伴い、青年の今までで最大の教育活動が始められた。市町村青年活動の領域では、国・大管区青年部の新設が急速に進んだ。余暇の館と青年昼餐所が至る所で出現し、よそで勤労に従事している青年のための青年宿舎は自営業の領域でも、新しく継続して作られた。平和な時代に原則に沿った考慮から必要だと思われそして指針に沿って主張されたものを、戦争は権力と現実との整合性に支えられて、効率的に実現した。

直接の教育の領域でも活発な活動が目立った。ヒトラー・ユーゲントと学校は、なかでも学童疎開について一致した共同活動の関係を見いだした。職業教育においては、10年以上前から計画されたドイツ青年の職業教育の法律が草案で出され、そして実際の発展は草案で示された方向で一貫して動いてきた。青年育成のため帝国労働共同体と地方労働共同体を通して、青年への教育的影響力を持っているすべての職場の結集は統一した基礎の上であり統一した活動に成功した。ヒトラー・ユーゲントの統一指導者達と共通及び高等の学校制度の教師達を除いてもなお職業訓練指導員、職業相談員、青年判事などが教育的活動を行い、そしてそれゆえ同時に国家社会主義青年教育の諸法律に結びつけられている。それは、ヒトラー・ユーゲントの専門指導者体の創設¹⁴の中にあらわれている。

とりわけ青年の文化活動は戦争により有益な影響を受けた。今一度おもちゃ遊びとクリスマス市、同様に映画製作を思い起こせ。それは、1942年から1944年までに生まれた「ヨーロッパ青年映画祭」と第一回青年純粋劇映画祭に見て取られるように、この数年注目すべき飛躍を見た。この発展は戦争によって強要されただけではなく、それは戦争勃発により目覚めさせられ、最高の動員のために刺激させられた多面的な活力もその原因として持つ。

青年応囀者は至る所に

直接要求される軍事のそして戦争経済の必要の陰で青年保護が背後に押しやられたとしても、それは驚くことではなかったろう。しかし決して過去の戦争の年に党と国家はその様な方向にほんのわずかだけでも譲歩しなかった。それは特に感銘を受ける事実である。逆に、強調されたように、まさに戦争の発展の

中で青年指導の最大限多様な活動領域で着実な前進が達成された。その原因、すなわち青年の正しい指導・養育への戦争の意義は、説明を要しない。しかし他のどんな戦争国がそのような成果を利用しうるだろうか。国家社会主義ドイツは青年が公の努力の中心に属するという確信に決して揺らぎを見せなかった。国家社会主義ドイツは積極的青年指導に今日まであらゆる可能な指示を与えた。

青年の取り組みなしで、青年に関しては何も起こらない。それが現在の状態である。帝国のように青年と青年活動の全体性の原則を大体に於いてでも具体化した国はない。立法への青年の参加の合目的性と必要性については、その利益に関して、これ以上述べる必要はない。たとえ戦争が共同活動領域を一層強く制限しても、青年の運命と教育に影響を与えるあらゆる重要な場でヒトラー・ユーゲントの応嘱者が存在する。短い概説がそれを明確にしている。すなわち、次のように。党の中ではドイツ労働戦線が中央の青年部局にならんで、専門部局、大管区、管区、地区ににその青年担当並びに大企業体に青年管理者と女子青年管理者を持ち、全ての職はヒトラー・ユーゲントとの了解の下で任命されている。大管区と管区の青年保護補導長が隸属しているナチス国民救済団の青年奉仕担当も事情が同じである。帝国生産階級（農林業）の青年職業監督者は同時にヒトラー・ユーゲントにおける農民身分・農業奉仕部門の長である。帝国宣伝指導部でヒトラー・ユーゲントの代表は青年に関する限り、全ての宣伝映画の問題を処理した。そのことは大管区、管区においても適用された。党の審判所においてヒトラー・ユーゲント指導者団の構成員がその共同体の人間に対し訴訟手続をとる。外地組織の帝国指導部に、外国在住ドイツ民族青年の全ての事業を処理する青年指導者は所属している。

国家と市町村の青年活動の上には、先ず第一にドイツ帝国の青年総統下の部署が挙げられ得る、それからヒトラー・ユーゲントにおける市町村担当者に対応した市町村と市町村組織の青年専門担当者が。国家と大管区の青年担当は真価が試され、職務にふさわしいヒトラー・ユーゲント指導者でしめられるのが増加している。帝国内務省では青年健康局がヒトラー・ユーゲントの帝国医師に管轄されている。帝国法務省は下部局に青年の権利と青年刑事訴訟の全問題をヒトラー・ユーゲント指導者でもある役人を通じて処理させている。すなわ

ち、青年—青年後見裁判官は、青年指導と教育において帝国法の定めるところにより真価を示さなければならなかった。帝国宣伝省における青年宣伝部責任者は同時に帝国青少年指導本部の対応した活動領域のための中央部責任者である。ここではラジオの例が参照されるべきである。青年ラジオ放送は、10年以上前からヒトラー・ユーゲントの参加により個人的・組織的に維持され、百万聴取者に明確に認知された。

東部占領地区省には青年局がある。ドイツ民族性強化帝国全権委員は、青年担当部局も指図し、新領土で行われる企画の枠に必要な応じヒトラー・ユーゲントとの了解のもとに青年応嘱者を組み入れた。

帝国労働省、大管区と都市の職業安定所には職業相談と後継者指導の領域に関する青年問題が集中し、その職員、職業相談員はヒトラー・ユーゲントの仲間からしだいに生まれている。帝国郵政省と帝国鉄道省では青年応嘱者があらゆる当該の問題を引き受け、ドイツ帝国青年総統の連絡指導者として機能している。最後に警察のもとでは青年事件の為の青年応嘱者を任命し、それにより彼等の活動に青年にふさわしい方法への意志を記録したことが想起される。

青年は彼等の生活と教育の問題が浮かび上がるあらゆる所で独自の責任の下に置かれた。この発展は、戦争中に停止せず、反対に特にはっきり現れた。常に公的影響力行使が青年の心を動かす所で、それは青年にふさわしい方法で生じる。彼ら固有の青年共同体の指導原則により行われていない青年への作用は、そもそも将来もほとんどあり得ない。

青年の態度

もし現在の顔の中の消極的表情と彼等との論争にも触れないのであれば、青年と青年活動の特徴の像形は不完全であろう。誰も青年が戦争に危険もなく突入することを主張しようとしな。周囲の危険は平時にもあったし、戦争中には彼等は通常の規模の数倍の危険に遭遇し、彼等は変化し、彼らの現象形態を幾重にもし、同時に家庭と学校による教育監督の制限が我慢されなければならない時であるゆえに、彼らは先鋭化している。この戦争中にしかもヒトラー・ユーゲントにおける上述のふたつに第三の教育担当者が援助しているが、それはもちろん特にその最良の教育力動員を現実には断念しなければならない。青

年の危機は事実であり、真の荒廃と犯罪の個々の事件は、それと闘うつもりなら、予知しなければならぬ消極的展開の可能性のあかしである。

ドイツでは戦争中青年の危機を抑えるために、積極的教育的影響を青年にあらゆる手段で強化するために、何も怠られなかった。裁判所から警察と類似の教育的影響力を持つ全部署を経て、ナチス国民救済団とドイツ労働戦線に至るまで、既述の青年援助のための帝国労働共同体における青少年指導本部の主導性の上に、全ての力の結集は及んでいる。それは、青年指導の旗に包括的な危機にある青年の援助を描き、以前と同じ諸原則の上に確立された。この総括は、危機にある青年に警察的または裁判的手段で秩序維持を命じること以上のことがなされねばならないという認識の表明である。一般的社会福祉事業はここに属する。すなわち、職場と空襲危険地域での勤労青年保護、結局のところ道徳的に健全な青年が生育できる公共空間の創設と維持である。礼儀正しく端正な生活態度の精神による全新聞雑誌と文化指導手段の均等発展なしに、この問題に対する公的で明確な態度なしには、特に戦争中の女子青年の態度も決して完全に満足させられることは出来ない。

それは、注目される避けられない課題である。しかし、ここで述べる危機は過大には評価されない。その証拠として戦争動員と忠実な勤労義務遂行があげられた時、危機はこの戦争における**青年の無比の試練**の陰に隠れかすんでいる。特に敵の空襲に対する、少年団員とBDM-女子青年の神聖な例は、戦争が必然的にもたらす危険な現象を明るみに出した。それは青年の価値ある行動である。多くの青年が空軍援助者、伝令あるいは他の緊急動員の際に倒れた。国家社会主義青年運動の歴史は将来この時代からの剛勇、大胆不敵の例を記録する。それは運動の時代に後れをとっていない。

誇りをもって故郷の戦線動員で試されたこの青年たちは勲章を授けられた。ヒトラー・ユーゲントの多数の団員・男女指導者は鉄十字1級と2級勲章を得た。鉄十字2級勲章の最も若い所持者は、彼の勲章授与時12歳でしかなかった。最若年女子青年も12歳であった。これらの男女青年はアドルフ・ヒトラー戦争青年の代表である。彼らの数は、青年の拘留あるいは収監判決の数よりはるかに重要である。前者は直面している要素に満足しているが、後者は巨大化

する共同体への無関心な態度を意味する表現である。

兵隊としての試練

ドイツにおける青年教育の価値の最終判定は戦線にある。戦線は最終判定をすでに下した。それは非常に明確である。ヒトラー・ユーゲントの団員と指導者はこの戦争中のドイツ国防軍の無数の快挙に決定的に貢献している。東部戦線の最初の月に、モントゴメリー司令部から派遣された「エクステンジ」の通信員は、アメリカ・イギリス軍はヒトラー・ユーゲントと闘っているという事実を書いた。彼はこれにより、ドイツ国防軍は戦争4年目でもっぱらヒトラー・ユーゲントの隊列から補充され、それによりドイツの前線兵士の政治的狂信並びに卓越した訓練と肉体状態が明らかになったことを読者に気付かせた。

この戦争年にヒトラー・ユーゲントは、前線にいないしいなかった古参指導者は最早ないと報告できる。圧倒的に戦傷者から成る指導体のごくわずかな部分だけがその職場に指導課題達成任務のため戻った。青年指導原則の試練は、ヒトラー・ユーゲントにおける不可欠な部署の数は非常に小規模で保たれることが出来るというさらなる成果を得た。

全体として戦争開始以来幹部の内約3万人のヒトラー・ユーゲント上級指導者一すなわち前線で利用できるすべて一が外国、前線にいる。これに約37万5千人のヒトラー・ユーゲント下級指導者がつけ加わる。戦死者として1944年3月までにヒトラー・ユーゲントの約3万人の指導者が報告されている。戦死者の数字はその際前線にいる仲間の数に比べると確実に数えるのは不可能である。なぜなら特に全体の数に計上される分隊・班指揮者のような下級指導者の損害は不正確にしか知られ得ないからである。

指導体の血の犠牲者は他に比べ非常に多い。それは宣伝目的に奉仕すべきでない。しかし何と云ってもドイツ青年指導者の不可欠な動員準備を示し、それはヒトラー・ユーゲント指導者に与えられた勲章にさらにその確証を発見する。1944年3月1日の状況の後、ヒトラー・ユーゲントの338人が彼等の隊列の中で最高勲章を着用し、そのうち37人は柏葉剣付騎士鉄十字勲章、5人が剣付鉄十字勲章、3人がダイヤモンド付鉄十字勲章を授けられた。彼等はこの戦争の英雄である。青年が彼等と今後も僚友関係で結びつくことは特に幸いであ

る。彼等がヒトラー・ユーゲントの隊列から生まれたように、彼等は彼等の最初の兵士教育の時代の名誉の頂点にいても認める。ヴェルナー・バウムバッハ少佐¹⁵は従士長・連隊長 (Gefolgschaftsführer und Führer eines Bannes), アルフレッド・ヅルシエル少佐¹⁶はヒトラー・ユーゲントの小隊長 (Scharführer), ヴィクター・ガラーフ・ツー・ヴィツゲンシュタイン少佐¹⁷はヒトラー・ユーゲント指導者に数えられ、ヘルマン・マックスオスターマン中尉¹⁸は旗手長 (Fähnleinführer), ハンス・フィリップ中佐¹⁹は従士長 (Führer einer Gefolgschaft), グラーフ少佐²⁰は彼が常に指導したヒトラー・ユーゲントを信奉していることを強調し、ヴァルター・ノボトニー空軍大尉²¹は師団の元幹部、そして最後に忘れられないハンスーヨアヒム・マルセイル²²はアドルフ・ヒトラー青年運動のエリートである。彼等は、ドイツ青年運動の模範でありその最良の代表である。彼等の中には、平時にそしてまさに戦時に、運命がそれを要求するなら、巨大な数百万の忠誠者に生きかたと死に方の模範を示すことになる全ての青年指導者の義務無条件遂行が確固としてある。青年が予感できたより早く、なによりも全霊から平和の創造物に身を捧げるこの青年達を、今や戦争の枯れることのない月桂冠が飾っている。

注
解説

- (1) 序文及び残された原稿の第21章の示唆による。(原稿の第21章は、本稿冒頭目次の第25章にあたる。この章の短い序は次の書き出しで始まっている。〈この本「国家社会主義青年活動1939-1944」は今までの章で戦争の最初の5年間のヒトラー・ユーゲントの課題の概要を叙述した。〉)
- (2) RB, 40/K, 3. 5. 1940 (Anweisung des Organisationsamtes zur Erstellung von Kriegstagebüchern der Jugend); vgl. auch RB 13/42K, 15. 6. 1942 (Anweisung des Reichsinstituts für NS-Jugendarbeit zur Führung von Kriegstagebüchern der HJ.)
- (3) Vgl. Gebrdschr. RJF, 25/41, 26. 8. 1941 (Anordnung des Bevollmächtigten Vertreters des Reichsjugendführers); darin hieß es: "Aus dem Organisationsamt geht das Chronikwerk der Hitler-Jugend an das Reichsinstitut über."
- (4) RB, 8/K, 3. 11. 1939 (Anordnung des Reichsjugendführers zur Gründung des Reichsinstituts für nationalsozialistische Jugendarbeit). 帝国研究所は特に「適切な研究団体, 大学, HJ指導者のゼミナール, 政治単科大学, HJの指導者学校ならびに青年指導アカデミーと結びついて, 科学的研究を行うか, 指示をし, それによりRJFの各部局の活動を援助」しなければならなかった。
- (5) Vgl. RB, 30/44 K, 5. 9. 1944, Sonderdruck (Anordnungen des Reichsjugendführers der Maßnahmen des totalen Kriegseinsatzes in der HJ); vgl. auch die umfangreichen, vom Stabsführer der HJ erlassenen Durchführungsbestimmungen zu den Maßnahmen des totalen Kriegseinsatzes der HJ, in: RB, 5/45 K, 28. 2. 1945.
- (6) 全原稿には残されていない第21, 23, 24章があるべきであった。それは、「戦争期の青年援助」「指導部の選別と養成」「HJのジャーナリズム指導」と表題をつけられた。もしかすると「東部占領地域の青年活動」が計画されていたかもしれない。
- (7) ここでは限られた例をあげる。

So entsprechen zum Beispiel große Teile des Kapitals "Der Landdienst im Krieg" wörtlich dem vom Chef des Amtes Bauerntum und Landdienst der Reichs Jugendführung, Simon Winter, verfaßten Aufsatz: Entscheidung für das Land. Ein Rechenschaftsbericht über den Landdienst der Hitler-Jugend, in Das Junge Deutschland, Heft 7/1943, S.161-172; zahlreiche Passagen des Kapitals "Das kulturelle Schaffen" sind identisch mit Teilen des von Heinrich Hartmann, Hauptabteilungsleiter im Kulturamt der Reichsjugendführung, verfaßten Aufsatzes: Die Jugend in der Technik. Ein Beitrag zum "Technisc

hen Wettbewerb der Hitler-Jugend 1944”, in: ebenda, Heft 4 / 1944, S.61-67, und die die Musikarbeit betreffenden Abschnitte in diesem Kapitel wurden offensichtlich von Wolfgang Stumme, Leiter der Hauptabteilung Musik im Kulturamt der Reichsjugendführung, verfaßt, wie ein Vergleich mit Aufsätzen des von ihm herausgegebenen Bandes Musik im Volk. Gegenwartsfragen der deutschen Musik, Berlin 1944, ergab. Die häufig publizierenden Sozialexperten der HJ, Leopold Ost und Albert Müller, Abteilungsleiter im Sozialen Amt bzw. Hauptschriftleiter von Das junge Deutschland, scheinen die Verfasser des Kapitels “Einsatz im Beruf” gewesen zu sein, wie ein Vergleich mit deren, im Literaturverzeichnis angeführten Veröffentlichungen zeigte; vgl. z. B. die Abhandlung von Ost, Leopold: Das Jugendwohnheim, Berlin 1944, die in vielen Passagen identisch ist mit dem ersten Abschnitt des 3. Kapitels. Die juristischen Passagen des Kapitels “Erfassung und Jugenddienstpflicht” scheinen von den Juristen Gerhart Klemer, Leiter der Rechtsdienststelle im Sozialen Amt der Reichsjugendführung und Geschäftsführer der Reichsarbeitsgemeinschaft für Jugendbetreuung, und Edgar Randel, Landgerichtsrat und Mitarbeiter im Reichsamt der Reichsjugendführung, zu stammen, während weite Teile des Kapitels “Überwachung und Gerichtsbarkeit” offensichtlich von William Knopp (Hauptabteilungsleiter für Überwachung im Personalamt der Reichsjugendführung und Leiter der Arbeitskreise “Bekämpfung gleichgeschlechtlicher Verfehlungen” und “Behandlung der Fremdvölkischen” in der Reichsarbeitsgemeinschaft für Jugendbetreuung), Heinz Kümmerlein (als Landgerichtsrat Oberregierungsrat und Referent für Jugendrecht Jugendstrafrecht im Reichsjustizministerium und Verbindungsführer zur Reichsjugendführung) und Walter Tezlaff (HJ-Oberrichter und K-Chef des Amtes für Gerichtsbarkeit in der Reichsjugendführung) verfaßt zu sein scheinen, wie Vergleiche mit deren, ebenfalls im Literaturverzeichnis angeführten früheren bzw. zeitgleich erschienenen Veröffentlichungen ergeben haben.

- (8) テーマ「第三帝国における青年」の研究蓄積とその叙述形態は、多様であるので、分類するのは難しい。ドイツ青年運動の部分としてヒトラー・ユーゲントが扱われている出版物、第三帝国を複合体として考察した著述におけるヒトラー・ユーゲントの叙述、もっぱら「ヒトラー・ユーゲント現象」を対象とした個別研究、国家社会主義の教育・社会化過程の部分としてのヒトラー・ユーゲントのもっぱら教育学的方法による研究、あるいは教育学のドイツ並びに国際的歴史の枠のなかでの研究、青年政治

社会問題についての詳細な研究、ヒトラー・ユーゲントの特定の活動領域や青年の特別な集団の研究、他の青年団体に対するヒトラー・ユーゲントの権力掌握貫徹闘争の叙述、自伝と思い出による著作、日常生活あるいは精神的様相の研究、第三帝国における青年の抵抗分析に於けるヒトラー・ユーゲント叙述等々、写真・図などの出版物の例は省く。

(なお、ブドルスは先行研究に共通する欠点を別の注で次のように指摘している)

Dudek, Peter: Die "junge Generation" und ihr Bedeutungswandel in der nationalsozialistischen Ideologie, in: Bildung und Erziehung, 40 (2/1987), S. 183-199. この183頁で、「問題の多い活動を受け入れた形成教育の体系は現実化したと想定され、NSの社会化の動態分析は捨て」さられているとすでに10年以上前に嘆かれていた。この社会化研究に有益な所見は、少なくとも歴史科学研究にもあてはまる。

(9) 様々な意図と形式による部分的な研究業績には次のものがある。

Jahnke, Karl Heinz: Zur Rolle der deutschen Jugend im Zweiten Weltkrieg. Stand und Perspektive der historischen Forschung, in: Deutsche Jugend im Zweiten Weltkrieg, Rostock 1991, S.9-24; ders.: Hitlers letztes Aufgebot. Deutsche Jugend im sechsten Kriegsjahr 1944/45, Essen 1993, S. 7-10; Keim, Wolfgang: Erziehung im Nationalsozialismus. Forschungsbericht, Wien 1990; Klönne, Arno: Einige Bemerkungen zum Stand zeitgeschichtlich-politischer Jugendforschung, in: Interdisziplinäre Jugendforschung. Fragestellungen, Problemlagen, Neuorientierungen, hrsg. von Wilhelm Heitmeyer, Weinheim / München 1986, S.89-98; vgl. auch Bibliographie. Deutsche Jugend im Zweiten Weltkrieg, hg. von Karl Heinz Jahnke und Carsten Ulmann in: Deutsche Jugend im Zweiten Weltkrieg. Rostock 1991, S. 122-137; stärker auf Jugendopposition und-widerstand (auch und gerade im Zweiten Weltkrieg) ausgerichtet sind die Literaturübersichten und-auswertungen von Breyvogel, Wilfried / Stuckert, Thomas: kommentierte Bibliographie zum Jugendwiderstand im Nationalsozialismus, Bonn 1991, S. 326-338, und besonders die ausführliche Zusammenstellung bei Schilde, Kurt: Im Schatten der "Weissen Rose". Jugendopposition gegen den Nationalsozialismus im Spiegel der Forschung (1945-1989), Frankfurt / M.1995, S. 241-404.

序

- 1 原稿一校正刷りの最初の案では、この序として考えられたテキストの見出しが「活動する青年 1944」となっていた。それは校正者により 1944 年 7 月にこのように修正された。
- 2 Vgl. RGBL., 1943. T. I. S. 664 (Verordnung über die Heranziehung der deutschen Jugend zur Erfüllung von Kriegsaufgaben, 2. 12. 1943)

第 1 章

- 1 校正刷りにはこの章の表題は「青年と戦争 (Die Jugend und der Krieg)」となっていたが、校正者により 1944 年 7 月にこのように修正された。
- 2 この引用の出所は確認できない。
- 3 DNB, Berlin, 30. 9. 1939; hier offensichtlich zitiert nach Kaufman, Das kommende Deutschland, S.313 f.
- 4 Offensichtlich zitiert nach Kaufman, Das kommende Deutschland, S.314.
- 5 Vgl. Hitlers Rede am 1. 9. 1939, in: Verhandlungen des Reichstags. 4. Wahlperiode 1939. Bd. 460. Stenographische Berichte 1939-1942. Anlagen zu den stenographischen Berichten. 1.-8. Sitzung, hier s. 48.
- 6 Öffensichtlich zitiert nach: RB, 1/K, 1. 1. 1940
- 7 Im Unterschied zur einer Reihe von Schreiben, die die Ablösung Schirachs als Reichsjugendführer und seiner Ernennung zum Gauleiter betreffen (vgl. RA, R 43 II/515), ist dieses, von Kaufmann schon 1940 in Das kommende Deutschland, S. 264 (1943-S. 309) auszugsweise zitierte und als "Handschriften" Hitlers bezeichnete Schriftstück dort nicht vorhanden.
- 8 Vgl. RGBL., 1939, T.I, S.710 (Zweite Durchführungsverordnung zum Gesetz über die Hitler-Jugend-Jugenddienstverordnung, 25. 3. 1939)
- 9 Vgl. ANBl., 1941, S 119 (Erlaß des Jugendführers des Deutschen Reichs über die Erfassung und Aufnahme der Jahrgänge 1924 bis 1929 zum Dienst in der Hitler-Jugend, 12. 9. 1941).
- 10 Vgl. RGBL., 1939, T. I., S. 2178 (Verordnung des Reichsministers des Innern über die nachgeordneten Dienststellen des Jugendführers des Deutschen Reichs, 11. 11. 1939)
- 11 Vgl. RGBL., 1939, T.I, S 710 (Zweite Durchführungsverordnung zum Gesetz über die Hitler-Jugend-Jugenddienstverordnung, 25. 3. 1939)
- 12 Die Neujahrsparen von 1940 bis 1944 sowie von 1945.
- 13 Vgl. die dieser Darstellung diametral entgegengesetzten Anordnungen in: RB, 17/44 K, Sonderdruck, 30. 5. 1944 (Anordnungen des Reichsjugend

führers zur Gestaltung der Kriegsfreiwilligenbewegung unter den Angehörigen des Jahrgangs 1928); RB, 36/44 K, 6. 11. 1944 (Aufruf Hitlers an die Kriegsfreiwilligen des Jahrgangs 1928, 7. 10. 1944); RB, 4 / 45 K, 27. 2. 1945 (Anordnungen des Reichsjugendführers und Ausführungsbestimmungen des Stabsführers zu Gestaltung der Kriegsfreiwilligenaktion für die Angehörigen des Jahrgangs 1929, 7. 2. 1945).

- 14 Vgl. RB, 2 / 44K, 19. 1. 1944 (Erlaß des Reichsjugendführers über die Einführung von Fachführern und Fachführerinnen)
- 15 Werner Baumbach, ヒトラー・ユーゲント出身騎士鉄十字勲章第一号, 1916年12月27日クロッペンブルグ生まれ。1935年4月1日ナチ党入党, 党員番号3.604.869; コロッペンブルグヒトラー・ユーゲント飛行団指導者, 南オルデンブルグのヒトラー・ユーゲント大管区指導部の飛行訓練専門担当者, 18歳の誕生日までには全グライダー操縦証明書を得, 1934年党大会でヒトラーと会見, 1936年4月国防軍入隊, 1939年9月から空軍少尉, ワルシャワ攻撃により2級鉄十字勲章, 1940年5月イギリス軍艦攻撃により1級鉄十字勲章, 1940年4月からノルウェー進駐, 1940年4月20日爆撃によるフランス巡洋艦撃沈によりヒトラーから騎士鉄十字勲章授与さる。1941年7月総計24万トン船舶撃沈で柏葉付鉄十字勲章, 1942年8月30万トンで剣付鉄十字勲章, 1944年戦闘機将軍, 1945年始めナチ体制から距離を置き, ヒトラーの破壊命令をアルベルト・シュペールと共に無視, 1953年10月アルジェンチンで空軍顧問の時不慮の死。
- 16 Alfred Druschel, 1917年2月4日ビントザクセン生まれ。1935年5月1日ナチ党入党, 党員番号2.434.224; ヴィスバーデンのヒトラー・ユーゲント指導者; 航空機指導者, 1939年9月2級鉄十字勲章, 1940年5月1級鉄十字勲章, 1941年8月中尉の時騎士鉄十字勲章, 1942年9月ソヴィエト戦線での600回出撃で柏葉付鉄十字勲章, 1943年2月700回出撃で剣付鉄十字勲章, 1945年1月ベルギー上空で戦死。
- 17 Viktor Graf zu Wittgenstein, 1881年6月25日ザルツブルグ生まれ, 1932年3月1日入党, 党員番号992.825,
- 18 Max-Hellmuth Ostermann, 1917年3月17日ハンプブルグ生まれ, 1937年5月1日ナチ党入党, 党員番号4.974.456; 航空機指導者, 1940年2級及び1級鉄十字勲章, 1941年9月騎士鉄十字勲章, 1942年3月中尉の時62機撃墜で柏葉剣付騎士鉄十字勲章, 1942年5月100機撃墜で剣付鉄十字勲章, 1942年8月ソヴィエト戦闘機と闘い戦死。
- 19 Hans Philipp, 1917年3月17日マイセン生まれ; 飛行機指導者, 1939年10月2級鉄十字勲章, 1940年5月1級鉄十字勲章, 1940年10月中尉の時20機撃墜で騎士鉄十字勲章, 1941年8月62機撃墜で柏葉付鉄十字勲章, 1942年3月大尉の時86機

撃墜で剣付鉄十字勲章，78日間で80機撃墜し総計203機撃墜，1943年10月ノルトホーン上空で戦死。

- 20 Hermann Graf, 1912年10月24日エンゲン生まれ，管理助手（Verwaltungsassistent），未婚，1933年5月1日ナチ党入党，党員番号2.317.222；飛行機指導者、1941年8月2級鉄十字勲章，10月1級鉄十字勲章，1942年1月少尉の時42機撃墜で騎士鉄十字勲章，1942年5月104機撃墜で柏葉付鉄十字勲章，106機撃墜で剣付鉄十字勲章，1942年9月172機撃墜でダイヤモンド付鉄十字勲章，敗戦までに212機撃墜，1988年11月ラシュタットで死去。
- 21 Walter Nowotny, 1920年12月7日グミュート生まれ，1938年5月1日ナチ党入党，党員番号6.382.781，ヒトラー・ユーゲント指揮者，飛行機指導者，1942年9月少尉の時56機撃墜で騎士鉄十字勲章，1943年9月中尉の時189機撃墜で柏葉付鉄十字勲章，1943年9月大尉の時218機撃墜で剣付鉄十字勲章，1943年10月ダイヤモンド付鉄十字勲章，442回出撃で258機撃墜，1944年11月ブラムシェで戦死。
- 22 Hans Joachim Marseille, 1919年12月13日ベルリン生まれ。航空機指導者，1940年2級，1級鉄十字勲章，1942年少尉の時50機撃墜で騎士鉄十字勲章，1942年6月中尉の時75機撃墜で柏葉付鉄十字勲章，101機撃墜で剣付鉄十字勲章，同年9月126機撃墜でダイヤモンド付鉄十字勲章，1942年9月までに158機撃墜，1942年9月30日アフリカ戦線にて落下傘で脱出の際死傷を負う。